

Title	縄文土器文化研究序説
Sub Title	
Author	江坂, 輝弥(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.4 (1982. 3) ,p.124(548)- 126(550)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学位請求論文審査要旨 彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昭和五十七年一月三十日

慶應義塾大学三田史学会長

河北 展生

江坂輝弥君学位請求論文審査要旨

『縄文土器文化研究序説』

本論文は著者の四十余年に及ぶ、わが国先史時代の“縄文土文化研究”に関する成果をまとめ、初めて体系的に世に問うたものである。縄文土器文化の研究は一八七七年にアメリカ人エドワード・シルベスター・モースが大森貝塚の発掘を行ったのを端緒とし、多くの優れた先駆たちによって進められてきたが、一九三〇年代に入つてから急激に近代科学としての地位を確立し、驚くべき進歩をとげた。著者はこの好機にめぐりあい、幾多の優れた先輩の指導を受けながら、専門家としての道を歩みつゝけてきた。

この科学は特にさきの大戦の終るのをまつて、急激な進歩をとげたが、著者は常にその先端に立ち、足跡を全国にあまねくしたばかりでなく、韓国の古代文化にも特に深い造詣を持つている。また古くから龐大な量に上る報告、論文を公表してきたことも特筆されるべきであるが、本書は中でも特に主要な三一篇を選び、体系的に集成を試み、その成果を世に問うたものである。

さて縄文土器文化については前述した通り、百年を越える研究の蓄積があるが、考古学研究の特性として、十分な理解と精緻な鑑識眼が必要とされ、あらゆる近代科学を駆使することが要求される。著者は年少の頃からこの点に着目して、地理学、地質学、

をはじめとして、動物学、植物学、鉱物学など広く自然科学を修めた結果、一頭地を抜く新境地を開き得たのであった。とくに幼時から遺跡、遺物に親しみ、すぐれた鑑識眼を体得し、多くの先駆から教えを受けるために努力したことも特筆に値するであろう。本論文はそれを証して余りがある。

さて本書の内容について検討を加えると、第一章は著者の研究の核心をなすものというべく、縄文土器の誕生から終末までの長い歴史を全国に亘って精査し、数千年に及ぶ間に作られた土器をそれぞれの製作技法、形態、装飾の各方面から詳細に吟味し、地域型式、時期型式に細別し、時期型式の年代序列を発掘層序、形式推移観などを通じて確立し、同時に全国的に特定形式の分布を追跡した。このような操作は他の研究者も試みているが、数次に亘る改訂を重ね独自の編年表を作製した。それとともに特に縄文土器の発達の基盤をなす所謂縄文時代早期の土器に主力を注ぎ、その遡り得る極限を探つて、今日の段階では決定的とも云える結論に到達している。その研究過程を示したものが、第一章の一三篇の論考であり、第一篇の一九四二年から、第一二二篇の今日に至る四十年に及ぶ嘗々たる軌跡を明らかにしている。

さらに我国の各地域において遡り得る最も古い土器型式をもつて縄文土器の起源を考え、その型式の依つて来るところを国外に摸索し、さらにその特色が劃一的なものではないことを指摘して、それぞれの出自がシベリヤ沿海州、或いは華中からインドシナに求められるなど、一元一系的なものではないことに着目し、縄文土器の多元論を展開したのである。このことは、それぞれの

土器型式の分布する地域の地理的条件、それに伴う貝塚の有無、随伴する石器その他の遺物の性格などが深く考慮されていて、それらの初次文化の実態を注意深く取り扱うことによって到達されたのである。なお、著者の縄文土器文化の系統論の当否については今後に俟つものがないとはいえないが、近年の著者の韓半島における研究はこの系統論の延長上にあるものと見られ、新たな成果を期待するものである。

また、著者の研究における著しい特色の一つに縄文時代における自然界と、そこに展開した人間生活を把握し復原しようと意図する点を挙げねばならぬ。その一端が本書では第三章『縄文土器文化時代の先史地理学』に収められた諸論文である。縄文土器の出現は洪積世から冲積世への移行期、ヨーロッパの後氷河期乃至冲積世の初頭の時期、と考えているが、この自然界の転換期は洪積世の当時にくらべ、人類の生活にとっては安定度を増したといえる。すなわち気候の温暖化に伴って動植物が次第に繁栄し、人類の生活資源が豊かになった。後氷河期の解氷による海水面の上昇は世界的な規模で行われ、太平洋岸もその影響を受けて水陸の状況が著しく変化し、これに対応して植物、陸棲動物、水棲の魚介類などの食料資源も大きく変った。このような海面の上昇の極限が縄文土器文化時代の早期に当るのであるが、著者は前にも触れたように、地理学、地質学、動植物学、鉱物学などの科学を修得し、これらの諸科学の成果を援用しながら、長期に亘る縄文土器文化時代の人間生活の様態を自然環境の変化との関連において動的に把握し、論述している点を高く評価せねばならない。

次いで著者は第二章を「縄文土器文化の渡来栽培植物の研究」に宛て、稻以外の各種栽培植物が人為的に将来されたことを論証しようと試みている。ただこの点のみについていえば、われわれは海流暴風雨、渡り鳥などによる自然作用についても考慮する必要を考えているが、著者は縄文人の自然資源利用の中で、植物利用の在り方について、極めて特異な所論を展開させていることに注目しておきたいのである。

第三章は、縄文時代における先史地理学的研究にあてられていく。古くから東木龍七氏などの地形学者や地質学者によって研究されてきたが、さらに縄文土器の編年研究の発達と共に両者相俟つての検討が行われて今日に至っている。著者はに貝塚を精査して、その貝類の性質を識別し、それぞれの時代における地形の復原を試みると共に、海岸線の変動の跡を辿っているが、このような地理学的方法論によって全国的に先史地形の復原、気候の変化、火山活動に至るまで検討を加えた論考は他に例が少い。さらに人文地理学的に、それぞれの時代の交通、交易、集落立地を考察し、土器形式の分布などから当時の人びとの生活と環境の係わり合いを詳細に見つめることによって、著者独自の見解を明らかにしている点も特に評価するに値すると思われる。

概略上に述べたような構成と内容から成る本論文の研究成果は、従来の日本考古学において、必ずしも十分とは言えない分量を掘り下げたものであり、或いはやや等閑に附せられていた分野、ないしは安易な解釈による通説に対し痛烈な批判を加えるものであり、著者の幅の広い研究と自然科学に関する高度の素養

によって、はじめて為し得たものと称して差し支えなく、本論文の説く所をさらに十分検討することによって、日本考古学の新たな展開が見られることを期待して止まない。

ただ本論文によって研究が完成されたわけではなく、上述のような幾つかの点については再検討の余地があろうかと思われるのも当然のことであろう。

しかしながら、著者の研究と視点には新らたな進歩と大成を窺うに足るものがあることはいうまでもなく、現時点において、この優れた業績をあげた著者は文学博士の称号を帯びるのに充分な資格があるものと判定する。

昭和五十七年三月五日

論文審査担当者 主査 慶應義塾大学教授 文学博士 清水潤三
前東京教育大学教授 八幡一郎
早稲田大学教授 西村正衛
慶應義塾大学教授 伊藤清司

昭和56年度三田史学会大会について

昭和56年度の本会大会は、12月5日（土）三田キャンパスにおいて開催された。内容は左記の通りである。なお、同時に行なわれた総会で、河北展生教授が新会長に就任した。また、夕方山食において懇親会があり約50名が出席した。

研究発表

国史部会 第一校舎104番教

- 1 天保期小田原藩における鉄砲取調人について
—御殿場地方の事例を中心に—
- 2 家茂時代幕閣の変遷と幕権強化
—元治元年六月幕閣の更迭と其意義—
- 3 幕末期の対馬藩と対朝鮮政策
- 4 東寺の俗別当をめぐって
- 5 上野国新田庄の有徳人 慶應義塾普通部 小谷 俊彦氏
慶應義塾大学（大学院修士課程）湯浅 吉美氏
- 6 東洋史部会 第一校舎106番教室
—一世紀後期のファーブルス地方における Khumar-Tagin 政權について—セルジューク朝下のアタベク政權発生史—
- 7 図書館資料整備センター 森川 孝典氏
- 8 清代社倉制度の一考察
- 9 慶應義塾大学（大学院修士課程）家室 茂雄氏
- 10 嘉靖海寇反乱史研究の動向と若干の問題点
- 11 楚の孫叔敖について
- 12 西洋史部会 第一校舎107番教室
初期ビザンツにおける 'circus faction' の宗教的背景について 慶應義塾大学（大学院修士課程）稻田 浩氏
ジュール・ミシヨンの歴史認識「people」の概念を中心にして